

monthly graphic journal : houdou nippon issue 188 / Nov. 2004

# 報道ニッポン

11  
Nov. 2004

特別  
企画

## 再生日本

CLOSE UP

●混迷の時代に強い～Specialistに学べ

- 企業家たちの横顔に迫る
- こだわりの食彩逸店
- ドクター訪問
- ニッポンを支える技と心～VIP・ザ・職人
- 寺社散策・地域に息づく「ニッポンの心」

特集 「プロ野球維新」を実現するための戦略

探訪 レンズの向こう側に映る国——香港

時代を読む

迷走した球界再編問題  
プロ野球、来季「パ6・セ6」で合意  
表紙：古田選手会長ら

報道特集

# 何のための郵政民営化か

# 地域住民や患者との コミュニケーションを大事にした リラックスできる口腔外科診療所

●自分が受けたい治療を実践する

地域に密着した活動が続ける医療界の担い手たち



信州口腔外科インプラントセンター所長  
松本歯科大学口腔顎顔面外科学講座臨床教授

**北村 豊**  
Yutaka Kitamura

奈良市出身。幼いころより虫に興味を持ち、飼育や収集を行っていたことから東京農業大学に進学する。しかし、手先の器用さを生かし、その後神奈川歯科大学に転入。卒業後に勤めた松本歯科大学では助教を務めるなど知識や技術を深める一方で、青年海外協力隊員となり、マレーシアに赴き、国立先住民病院で3年間に渡って医療協力を行う。その後も長野県内の病院に勤めるが、自分の理想とする診療所を設立したいと、「信州口腔外科インプラントセンター」を開業。日本口腔外科学会認定 口腔外科専門医の資格も持つ。

大門 まずは、所長の参みから伺いたいと思います。ご出身は？

北村 奈良県です。大学を卒業後は松本歯科大学に入局し、助教授を務めるなど19年間勤めさせて頂きました。そのうち3年間は青年海外協力隊員としてマレー



インタビューー 大門 正明

シアの先住民、オランアスリのための国立病院に医療協力していたこともあるんですよ。オランアスリはジャングルに住んでいましてね。ジャングルで暮らす人々は生活の知恵や工夫がないと生きていけない厳しい環境にありますが、とても豊かな心の持ち主ばかりで、私は「生きるとはどういうことなのか」など、非常に偉いことをたくさん教えてもらいました。

大門 開業を決意されたのはなぜですか。  
北村 自分が目指す診療所があったというのが理由ですね。私は診療所とって

も患者さんがくつろげる空間にしたかったです。そのため当診療所の建物も、一見普通の家のような造りにし、室内も広めに設計しました。また、診療するだけの場所ではなく、私が海外での経験談などを話したり、地域の方々や患者さん同士が交流を囲める場所としても利用できるような部屋も造ったんですよ。周囲からはよく「診療所らしくない建物だ」と言われますね(笑)。

大門 (笑)私も最初は驚きましたよ！しかし、室内に地域の方々や患者さんたちとの交流が持てる場があるとはもっと

## 信州口腔外科インプラントセンター

長野県上高井郡小布施町林 2249-1  
TEL 026-242-6888 FAX 026-242-6188

## 「生きる上で大切なもの」

大切なことを教えてくれた彼らに恩返しをしたい



北村 豊

Yutaka Kitamura

信州口腔外科インプラントセンター 所長  
松本歯科大学口腔顎顔面外科学講座臨床教授

ジャングルに住むマレーシアの先住民・オランアスリたちに医療協力を行うべく毎年マレーシアを訪れているという北村所長。“ジャングルに行く”と聞くだけで人は大変だと思うだろう。

しかし、所長は「訪れるたびに彼らからたくさんのことを教えられます。生きることの厳しさやコミュニケーションの大切さなど、生きる上で一番大事なことを

彼らが思い出させてくれるのです」と語る。そんなオランアスリたちに、今度は自分がオランアスリファンド（マレー半島先住民基金）を設立するなど、できる限りの恩返しをしたいと所長は熱く語った。



## 大門正明のドクター訪問

■「患者さんがくつろぐことができ、地域の方々と交流がもてる場所をつくりたい」という思いから「信州口腔外科インプラントセンター」を開業した北村所長。所長の思いのとおり、同診療所には患者さんだけでなく、多くの人々が足を運んでおり、地域の憩いの場として毎日笑顔の絶えない場所となっている。

驚きです。

北村 地域の皆さんとの交流を大切にしたいというのが、開業を決意した理由の1つでもあるからなんです。一期一会、せっかくの縁で出会ったのに、単に医者と患者さんというだけではもったいない。もっと皆さんと接点がもてるようになりたいと思ったんです。ですから私は診療中でもコミュニケーションを何よりも大切にしています。上手くコミュニケーションを図るには会話だけでなく、そのときの雰囲気も大事になりますから、ユーモアや笑いを欠かさないように心がけています。笑いが免疫力を上げるというのは立証済みですからね(笑)。

大門 患者さんもリラックスして治療を受けられそうですね。

北村 そういう風に考えるようになったのはジャングルでの経験があるからこそ

なんです。国が違うから人間も違うのかというところではありません。どこの国の方でも「楽しいことは楽しい。悲しいことは悲しい」。感じ方は一緒で、ただ文化が違うだけなのです。向こうで暮らしていたとき、「あまり親しくすると仕事にしにくくなるからやめたほうがいい」と言われたこともありましたが、私は彼らとずっと一緒に行動をとりました。ジャングルにも一緒に行き、吹き矢を使ったり、ハンティングをしたり…。同じ生活を送ればコミュニケーションも図りやすくなり、良い結果につながると思ったからです。そのお陰でコミュニケーションを図るというのはどういうことなのか、そしてその大切さなど、本当に様々な事柄を学ぶことができました。

大門 ジャングルで得られた経験は貴重なものばかりですね。では、所長のモツ

トーとは？

北村 患者さんがもし自分だったら、もし家族だったらと考えて、治療に臨んでいます。毎年海外に行っていることもあり、世界的スタンダードレベルの医療を維持できるように心がけています。ですからこれからも弛まぬ努力を続け、「自分が受けた治療」を実践していきたいですね。

大門 開院されてまだ間がないですが、皆さんの反響はいかがですか。

北村 患者さんの紹介で来られる方が多く嬉しく思っています。それに地域のドクターをはじめ、横とのつながりも大切にしていますので、そうした先生方の紹介で東京から足を運ばれる患者さんもおられるんですよ。

大門 所長の技術の高さやお人柄が窺えるお話です。ジャングルにはまた行かれるご予定ですか。

北村 はい。我々はモノが溢れる時代に生まれ育ち、いくらモノがあっても「もっともっと」と満足ができない、心の貧しい人間になってしまっています。しかし、時間やモノに縛られない先住民たちは、「足ること」を知っているのです。例えば私が食べ物を分けてもらったときなど、「ありがとう」というと彼らは不思議がるんですよ。というのも、食べ物をたくさん持っている人が持っていない人に分けるのは、彼らにとってごく当たり前のことなので、彼らには「ありがとう」という言葉すら存在していないんですよ。そうした経験を1つとっても、私は彼らからたくさんのことを教えてもらっています。ですから今度は私が彼らの役に立てるように、できる限りの協力をしていきたいと考えているのです。

(2004年8月取材)

## ジャングルで培ったもの

▼北村所長は、助教授として活躍するなど長年、知識や技術を積んできた人物とあって学者肌のような先生かと思いきや、マレーシアの先住民たちに医療協力を行うため、何度もジャングルに足を運ぶまでは生活を共にしてきたという破天荒な医師だった。▼だが、そのジャングルでの生活は所長にとって大変貴重な経験となった。「生きるとはどういうことなのか」、「コミュニケーションの大切さとは一体——」。そんな大切な事柄ばかりを学ぶことができたからだ。▼所長の診療はそうした経験の中で培ったものがあらゆる面で生かされており、周囲からは「親しみやすい」「きめ細かい診療だ」「休日でも見てくれる患者さん本位の先生だ」などと評判で、遠方から足を運ぶ患者さんも多いという。



▼一見普通の家のように見える「信州口腔外科インプラントセンター」。患者さんがくつろげるよう、温かい造りになっている。



▲床をフローリングにするなど外観同様に室内も木をふんだんに使用。患者さんがリラックスできる空間づくりがなされている。